平成１９年度　お茶の水女子大学経営協議会（第４回）議事録

日　　時：平成２０年３月１０日（月）１５：００～１７：１０
場　　所：本学本館２階　第一会議室（２１３室）
出 席 者：（学外委員）足立委員、江澤委員、北村委員、關委員
（学内委員）郷学長、和田理事、柴田理事、三浦理事、内田理事、羽入副学長、通山副学長
陪 席 者：桐村監事、山田監事、益田財務室長、大塚総合評価室長

１．開会

２．前回〔平成２０年１月２８日（月)〕議事録（案）の確認
修正等がある場合は、平成２０年３月１７日（月）までに、企画チームまで連絡することとした。

３．審議事項
（１）平成２０年度　年度計画（案）について
○平成２０年度　年度計画（案）について、総務機構長より、【資料３】に基づき、その主要事項についての説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。
また、表現上の文言修正が生じた場合には、学長に一任することが了承された。

■　主な議論は以下のとおり。≪☆学外委員からの意見、★大学側からの発言≫

☆今の説明の中では、附属学校に関する説明がなかったが、どのような位置付けになっているのか。

★附属学校に関する目標を達成するための措置として、１番目に、「運営方針について、附属学部を介して常に大学との意向調整を行う」ことが記載されている。本学には、附属学校部というものがあり、その附属学校部の中に、高等学校、中学校、小学校、それから幼稚園、保育所がある。ここには附属学校部長がいて、大学の執行部との間で密接な意見交換を行いながら運営している。
２番目として、「保育所・幼稚園・小学校・中学校・高等学校の５附属が同一キャンパスにある特色を生かし、人間発達教育研究センターや大学教員との共同研究の体制を作

り、学校間移行接続あるいは教育課程や教育実践に関する課題を設定し、研究を進める」とある。人間発達教育研究センターというのは、これまで「子ども発達教育研究センター」と言われていたもので、平成 20 年度から改組する新たなセンターなのだが、そこに、附属学校園の中から毎年１名を専任の講師として来ていただき、任期は２年なのだが、その間は、例えば中学校の教員をしていた方は、実際に中学校で教えることはほとんどなくなり、この人間発達教育研究センターで、ここに書いてあるような、学校間移行接続あるいは教育課程や教育実践に関する課題の研究を行い、大学教員との間で共同研究体制をとるという取組みであり、これは現在でもやっている。これを来年度も継続的に行う予定でいる。

３番目に、「附属学校生徒に対する特別選抜を引続き実施する。その効果をもとに選抜方法等の改善点を検討する」とあり、①として、「特別選抜制度の一環としての全学の諸学科・講座に設置した連携事業「選択基礎」の効果測定を行いながら、その充実を図る」、②として、「高大連携教育プログラム「教養基礎」などついて評価を行い、結果をフィードバックしたうえでそのさらなる充実を図る」ということが、平成 20 年度においては掲げられている。

４番目は、「大学理学部との緊密な連携により、理数教育の強化を図る」ということ、５番目は、「開発途上国への教育協力（女子教育、乳幼児教育を中心に）について、研修などに関して附属学校を活用する」ということで、これは、アフガンの女性教員の教育などをこれまでも続けてきたが、附属高校に関しても、このような形で進めていきたいと考えている。

★この計画は、平成 20 年度の計画であるので、次の中期目標期間における附属学校園のあり方ということは、非常に重要な問題である。本学は今、教員養成学部を持っておらず、教員養成の大学ではないので、そのような大学に附属学校を置いておく、ということ自体が、もうかなり厳しくなってきており、今後どうしていくかということは、本学にとって大変重要な問題である。今は、教育や研究面からお話しているが、業務運営、経営の面からも、大変大きな問題である。これは、今から詰めていかなければならない。

まさに、この平成 20 年度に、次期の中期目標・中期計画を作らなければならない段階に来ているので、委員のご質問がもしそういうことであるとしたら、このことは、私は大変大きな問題として捉えている。

☆４点ほど質問したい。１点目は、先ほどご説明があった業務運営面で、改善並びに効率化を図っていくというお話があったが、平成 19 年度においては、その経済効果としてどの位のことが発揮されているのか、同時に、平成 20 年度においては、どの位のことを目標にして考えているのか。

２点目は、TOEIC 導入の問題で、クラス別に２段階から３段階に増やして効果を出す

ということだが、大体の目標はどの位のところに置いて教育するのか、また、今のレベルはどの位なのかを伺いたい。

３点目は、これは大変結構なことで、推進してもらいたいということは、私もあらゆるところで発信しているのだが、交流協定校とのダブルディグリー制度の問題である。平成 20 年度の計画なのでまだ分からないかもしれないが、どんな大学をすでに射程距離に入れて考えているのか。

４点目は、タイ・バンコク事務所の設置ということであるが、国際化の一環として、アジア関係の展開ということは大変結構なことであるが、予算的にはどの位組んでいるのか、また、人的配置としてどの位の人員で構成しているのか、そして、ここを拠点として、アジア地域のどの辺のエリアまでをカバーして国際化を推進していくのかを伺いたい。

★１点目の回答としては、数値はにわかには出て来ないのだが、一つはアクションプランというのを、戦略担当副学長の主導において作り、それぞれの事務セクションが持っている様々な事務的機能の中で、効率化できるものは効率化しようというプランを平成 19 年度に作った。そこには、例えばアウトソーシングというプランもあるのだが、アウトソーシングでエスティメイトしてみると、現在、非常勤職員を雇用して行っているものに比べ、実は高かったりするといったような、さまざまなことが現実には起こってくる。アクションプラン全体としては、年度最後にならないと分からないが、数十万規模、あるいは数百万になるかも知れないが、効率化がされている、あるいはされるであろうと考えている。それは主に、事務体制の、今まであまり細かい部分でなされていなかったことの改善である。

それから、大きな事柄として、例えば人件費の抑制ということは、これはやらざるを得ない。毎年、効率化係数が掛けられており、だいたい４千万円オーダーで減らせと言われている。教員に直すと、おおまかに言って一人１千万円なので、４人や５人という削減をしていくという形である。これは、次に予算の話が出てくるが、毎年強制的にそこだけ削減されていくので、やらざるを得ない。

それから、３年位前に委員からご指摘されて、それは逆だと言われたのだが、非常勤職員を減らしたことに対して、「常勤を減らさざるを得ない状況の中で非常勤を減らすのはおかしい」とのご指摘を受けた。それはそうだと私どもも思い直し、当初は、非常勤職員を大幅に削減、５年間で半減するという目標を立てて、２年位はそれで走ったのだが、さらに、常勤職員も今言ったような意味で、教員も職員も削っていくという作業にもう入っている。ただ、このことについてはご指摘もあり、われわれも考えた結果、常勤が減っていくという状況の中で、教育の質、研究の質を落とさないために、非常勤という形で、運営費交付金自体で雇用する非常勤と、外部資金を導入することによって、任期付の教員や、あるいは事務職員を雇うという形での効率化を行っている。これは、

後ほど申し上げようと思っていたのだが、運営費交付金の中で、基礎部分の他に、特別教育研究経費あるいは政策課題対応経費といった、競争的な経費があり、文科省に認められたものがある。また、共通経費という、外部資金の間接経費を主とした予算措置を考えており、経費の目的に沿った範囲で人件費の有効利用を考えている。

☆私がお願いしたいことは、ただ今先生からもご説明があった通りで、毎年１パーセントというのはあまり大きな数字ではないと思うのだが、このような調整は、好むと好まざるに関わらずやられてしまう訳であり、財政の中で大きなウエイトを占めるようなことをさせられながらも、実は大学というのは、先ほどお話があった、いわゆる効率化問題と改善策によって、どのような形で、どのような経済効果をあげられるかということを、数値に置き換えていただき、例えば、学校における教職の方々と、学生ならびにこれに準ずるステークホルダーの方々にアナウンスして欲しいということである。このことは、他の大学にはない、法人化されたお茶の水女子大学という存在の表し方として大事だろうと考えているので、質問をした。

★大学院の教員会議というものがあり、学長室分室という所から、ＬＡＮを通じて全学にアナウンスができるようになっており、テレビ会議のようなことを行っている。そのような場で、今のようなことは学長も何度かおっしゃっている。ただ、教員や事務職員には、なかなか徹底されていない。学生に対してやったことは、ほとんどないと思う。

☆徹底しなければ、徹底するまでやっていただきたい。徹底的にやる、理解するまでやるということである。組織として、全体の連携の上に成り立っているわけだから、アナウンスをして理解してもらい、「自分たちが協力したことは、これだけの効果をあげているんだ。良かったな」「自分のところは足りないから、もっとやらなくちゃいけない」というような雰囲気にしていただきたい。そういう組織体制にして欲しいという意味で申し上げた次第である。

★本学は今、外部資金をたくさん頂いている。これは、他の国立大学に比べると、絶対値で言えば目立たないが、比率で言えば、この規模でこれだけ頂いているというのは、他にほとんどない状況である。それを私が申し上げても、なかなか分かっていただけないところがある。学内の先生方は、色々なことで苦しいと感じていると思うのだが、苦しいけれども研究費が維持できているのは、外部資金を頂いているからなので、もしそうでなければ、もっと厳しい。

☆それを、特に教授の方々にはよく知っていただくような工夫をして、徹底することが大事である。やはり、学長ならびに関係の方々が、表に対して努力をし、獲得してくる。

このような研究資金についても、どれだけの努力をしているかということについては、研究をしている先生には分からない方が多い。その点については、やはり知ってもらえるまで、徹底してやらなければ駄目だと思う。

★２点目の、TOEIC の点数についてだが、今日は資料を持ってきていないので、また必要があれば数値を出したいと思うのだが、現在のところは、５００点台の中ほどの数値である。入学時において全員に受験させ、１年生終了後にもう一回受験させる。ただ、学生たちには自費で受けさせている。

また、効果測定も行っている。本当は、１回目よりも２回目のほうが上がることが一番良いのだが、残念ながら、必ずしもそうなっていない。むしろ差が開いてしまう。入学試験の後と１年後とでは、上にも下にも開いてしまうということがあり、それで、平成 20 年度計画では、３段階のクラス編成によって、全体として底上げをしていくことを考えている。

TOEIC の点数だけでなく、もう一つ、英語力を上げていくためには、英語を身に付けるといったい何ができるのか、ということが見えてくる、体験する必要があると考えおり、基礎英語・中級英語のクラスの上に、上級英語というクラスを法人化後つくり、その中に、ビジネス英語であったり、英会話であったり、色々なメニューを入れている。また近年は、英語そのものを使って授業をする、例えば、国際政治を英語で授業するなどしている。今では、例えばアメリカのワシントン大学から先生を呼んできて、集中講義形式で、ネイティブに実際の授業をやってもらうという形で触れさせている。これは、非常に学生にとっても刺激になるので、この授業計画の中にもあるのだが、「国際規格のＦＤ戦略」というプログラム、これは、海外の教員に半年ぐらい来てもらい授業をしてもらうというものだが、学生に対して刺激を与えると同時に、教員にとってはＦＤになるというものも考えており、このような形で、授業そのもののメニューを充実化して刺激を与えるということで、点数も上げていきたいと考えている。

☆このような TOEIC を始めとした計画を立てながら、お茶大としては、当然海外の大学との協定がかなりおありだと思うのだが、そういうところに半強制的に、例えば１年間出して勉強させていく、同時に向こうからも、若干学生を受け入れるといったようなことは、お考えになっているのか。

★国際交流に関しては、国際・研究機構と一緒に進めているが、協定校自体はずっと増やしてきており、現在は、３２校にまでなっている。これは、学長があちらこちらでご発言されていることだが、早い時期に海外に出させる。昨年までの制度だと、２年生の後期に応募し、３年生の後期に行く。３年生の後期に行くと、実際に帰って来る頃には４年生の前期が終わりなので、就職も進路も終わってしまっている。特に就職は終わっ

てしまっているという状況なので、意欲的な学生もなかなか出にくいということがある。よって、１年生になった段階でアナウンスをする。場合によっては、実はやっていることなのだが、例えば TOEFL の夏期講座をやって、早い時期に留学体験をさせるということで、交換留学制度を活用した学生の留学を進めていくということは予定している。

ただ、全員一斉にやるということになると、特定の学科のコースなどを想定した仕組みになると思うので、まだ、現在の中期目標の中には入っていない。

☆私が感じるのは、これだけ企業社会がグローバル化されてくると、例えば、お茶大の卒業生を採用する場合にも、歴史と伝統プラス国際化された学生というのが、かなり要請されてきており、受け入れ体制もかなり変わってくると思う。ということは、活躍の場がさらに広がるということになるので、できれば、そのような方向付けをすることによって、キャリアとしての仕事の幅がかなり拡がってくるのではないかと感じている。

★その点については、実は昨年、早期留学育成という国際化プログラムを申請し、残念ながら通らなかったのだが、その際、企業を調査をしたところ、印象が変わってきており、コミュニケーション能力があるか、あるいはバイタリティーがあるかということを非常に重視することが、企業の中でも出てきていたので、採択はされなかったが、実質的には実施する方向で考えている。

☆そのような意味では、リベラルアーツを重点的に教育していくという点で、かなり良い方向付けをしているということは感じる。

☆英語教育にコンピューターは使っていないのか。

★交流教室と言えばいいのか、そのようなｅラーニングの教室があり、ｅラーニングの教材が置いてあり、学外からも少しソフトを入れなければならないのだが、アクセスできるようにはしている。

ただ、インストラクターを置いていないと、実際にはうまくいかない部分があって、設備があり、教材も買ってはいるが、今後はインストラクションを改善していきたいと考えている。そういう意味では、パソコンの導入などもプラスの糧になっていると考えている。

☆TOEIC の話が出てきたが、私の会社も、新入社員全員に TOEIC を受けさせている。国際化の時代ということで、TOEIC、英語力というのは大変重要だということは理解しているのだが、私は、「日本語検定をやれ」「英語ばかりやるな」とも思う。日本人が日本語をしゃべれないのではダメだし、正確な日本語をどうやってしゃべったらいいのかとい

うことも大事だということで、漢字検定はかつてあるが、今度、日本語検定をちゃんと受けさせる。TOEIC も大変重要なこと、それは分かっているが、日本人が日本語を忘れちゃいかんということも、大変重要と考えている。その点はいかがか。

★おっしゃる通りである。リベラルアーツでも、学部共通のコミュニケーションなどの講義でも、４月から積極的に進めていく。私どもは、全国の大学を調べているが、敬語の運用問題などについては、幸い私どもは非常に高い得点を取っており、その辺りについては、やはり、ポテンシャリティの高い学生が入ってきているということで、ますますそれをブラッシュアップさせていきたいと考えている。

☆よろしくお願いしたい。

★特に本学はということだったが、比較的女性は、表現力、あるいは言語力が割合高いように思う。

☆社会人になった人は、大抵、学生の頃もっと語学をやっておけばよかったということを言うので、とても良い機会だと思うのだが、一方では、今の大学生でもダブルスクールで語学学校に行ったり、あるいは、語学を勉強しようと思えば、街にいくつか学校がある。そういったところでも、TOEIC とか TOEFL のような形で習熟度をチェックしていく。

私のぼんやりとした理解だと、リベラルアーツというのは、カリキュラムがきちんと決まったものをこなして、点数化できる能力を付けていくということと同時に、うやむやとしたものに悩んで、考えて、じたばたするというような、ある意味非常にワイドな窓口を育てるという感じがして、こういうチャンスがあったら素晴らしいなと思う反面、これって何か部分売りできる部分だなという感じもする。もちろん、お金の問題や時間の問題もあるだろうが、どうしてもお茶大がやる、お茶大のカリキュラムに入れるものなのかな、という疑問も素朴にある。その辺りはどのように理解したらいいのか、少し教えていただければと思う。英語の能力を、第三者が分かるように、習熟度のきちんとしたものを得て、「わたしは TOEIC 何点よ」という形で出ていくという、そういう意味で。

★先ほど説明した、文理融合 21 世紀型リベラルアーツは、広い点では、語学や情報を含む教育を指しているのだが、20 年度から着手するのは、その中の、文理融合型の科目部分となる。今までのもので言えば、一般教育科目と呼んでいた部分を、テーマごとに再編成する。その中で、トレーニングを入れるという形でやっていくので、どちらかと言えば、委員のおっしゃられた、じたばたする。頭を使ってじたばたし、手も動かし、それで答えを出していくという部分にウエイトを置いた形でスタートする内容になる。

調べてみたのだが、これは他ではやっていないことなので、特色になると考えている。むしろ、この一つのキャンパスの中に文系、理系があり、学生も、このキャンパスの中で授業が全部受けられる。この大学の特徴を生かしたものが作れると思い、この文理融合型というのを考えた。

☆私が伺いたいのは、お茶大で、TOEIC で結論を出すということだが、そのことは、外部の語学学校とどのように違うのかということである。

★一般的に言えば、アウトソーシングの問題なども含めて、なぜ大学の中でやることになっているのかということを考え、追求していくというになろうかと考えている。

★質問の途中だったので、少し戻らせていただきたい。ダブルディグリーとバンコク事務所のご質問があった。

★ダブルディグリーについては、中期目標の中で掲げられており、昨年度、戦略的国際化プログラム申請の際にも、いわば必須の要件として出てきている。本学の状況としては、フランスのルイ・パスツール大学やドイツのバーギシェ・ブッパタール大学との間で、共同博士、ジョイントディグリーの仕組みは既にあり、取得者もいる。ただこれは、一緒に審査をするが、ただし、学位としてはどちらかの学位になるというもので、ダブルあるいはデュアルではない。それで、現在進んでいるダブルとかデュアルというものは、お茶大ならお茶大の学位を取りつつ、どこかで、その大学とは別のプログラムでもう一つ学位が取れるという仕組みだと解しているが、これについては、そのような協定校との間で、相手にもよるが、どのようなメニューを作れば双方にとってユニークか、ということで設定していくことになる。正直言って、これは着手が遅れているところなので、20 年度中に目処をつけなければならない項目と考えている。

☆これはぜひ進めていただきたい。また、国内ではお考えになっていないのか。

★国内では……。

☆文科省が、「それはだめよ」ということか。

★それは、私が今中教審でやっていることであり、学位を出すところが２カ所並んで学位記に書かれるようになるというシステムで、これは、学部あるいは大学院どちらも共同設置で可能になる。これから、まだ色々なプロセスがあるが、ぜひ本学も、本学だけでは出せないような分野の人を、やはりそのような形で養成していきたいと考えている。

今のところ、学部が複数ないと駄目だが、本学は３学部あるので、その条件は満たしている。

大学院のほうは、今はまだ文科省のほうもはっきりとは言わないのだが、本学は１研究科であるので、これができるかどうかは少し微妙なところで、これから制度設計が具体的に始まるところである。ちょうど私は今、その部分の、中教審の制度部会というところでやっており、本学の先生方にも、連携ということでお考えいただきたいということは、半年ぐらい前から言っている。おそらく、いくつかの案が出てくると思っている。

☆本件については、是非積極的に進めていただきたい。

★４点目のご質問だが、これは、後の報告事項にもあるのだが、２月 22 日に、本学のバンコク・オフィスを開設した。国際化戦略として、特にアジア、東南アジアを中心としたものだが、本学初の海外拠点である。今まではこういうものが無かったので、そういう意味では画期的なことである。

国際社会で活躍できる人材を、留学生はもちろん、日本人の学生どちらも含めて、そのような人材を輩出したいということと、やはり女性研究者、あるいは女子教育、海外途上国の支援ということである。これは今まで通りだが、これからは、やはりアジア諸国から、女性リーダーを目指す優れた人に留学して欲しい。そして、こちらからも出て行き、まさに交換で頑張ろうということである。場所としては、私どものような大学は、きちんとした事務所を借りるということが財政的に難しいので、日本学術振興会のバンコク海外研究連絡センターのビル、このビルの中には、大阪大学やいくつかの団体がオフィスを持っており、大変良い場所なので、学術振興会が持つ一室の一隅を共同利用させていただくことにした。家賃は４分の１払うということで、月額６万円ほどなのだが、４分の１のスペースをお借りする。区切られてないので、机一つとパソコン、それから、「お茶大のオフィスです」というポスターのようなものを貼り、常駐の人は置けないので、学術振興会と契約を結び、あちらがなさる様々な活動に協力する。誰かが尋ねて来られた時には、電話が置いてあるので、国際電話を通じて、本学の国際交流チームの方に来る。また、パソコンのメールアドレスがあるので、すぐにこちらに連絡が来るような形で開設をした。

具体的なことはこれからだが、開設記念のレセプションを開いた際、色々な関係の方をお招きした。本学は、タイでは、タマサート大学とアジア工科大学との間で協定を結んでいるが、他の大学にもこれから広げていきたい。特に、理系の分野が今、大変活発になってきているので、今まで協力していなかったところと新たに、と考えている。

色々な大学の学長さんもレセプションに来てくださり、例えば、カセサート大学とか、理系の大学とも是非協力し、協定を結んでいくために、これから進んでいきたい。

これはひとつ意外な発見だったのだが、本学に 100 年前、シャムから４人の留学生が

来ており、明治 36 年で、おそらく本学に初めて留学生が来た。その方たちがどういう生涯をたどられたか、大変興味があり、今回、少し手掛かりが得られないかと思い行ってきた。実は、それとほとんど同時期に、本学の卒業生で、本学の教員であった安井てつ先生という、後に東京女子大の学長にもなられている先生が、明治 37 年、その留学生とほぼ同時期に、クロスした形で、タイの皇后様のお招きにより３年間、皇室女学校を作るために招かれていた。その大学が現存しているということが分かり、是非訪ねたいと思い、22 日の朝、訪ねた。校長さんと理事長さんが会ってくださったのだが、とても綺麗な大学で、王宮のすぐ近くにあり、門を開けると花園のような素敵なお庭があって、本学の附属幼稚園から高校とそっくり同じ形態だった。ですから、安井てつさんが、本学をそっくり持ち込まれたのだと思った。今ではエリート校で名門校になっており、タイの有名校の二つ、タマサートとチュラロンコン、それから海外では、ハーバードやオックスフォードに行くということだった。

それに加えて分かったことは、図書館の中に資料があり、その資料を見てびっくりしたのだが、４人のシャムから来た留学生の写真が、その資料の中に残っていた。４人の方の一番右に、名前がジョンさんと書いてあり、その方が、実は帰国されてから、その女学校で教鞭を取られた。非常に長生きをされ、亡くなった後に、おそらく伝記のようなものだと思うが、写真の中に、シャムから来られた４人の写真が載っており、そのお一人だということが分かった。また、日本の写真もたくさんあった。おそらく日本にも残っていない写真もあり、タイからの留学生で、今、タマサート大学の准教授になっている本学の卒業生がいるのだが、彼女がその本を翻訳したいと言ってくれた。その後、ジョンさんのご家族もいらっしゃって、一冊本学に寄贈してくださった。その中に、25 年ぐらい前の日本の新聞記事があり、ジョンさんが、93 歳でまだかくしゃくとしているというインタビュー記事が載っており、当時、日露戦争に勝って、日本が戦勝国の気分でいたとか、思い出がビビッドな形で語られている。このようなこと発見したので、このことをこれから少しほぐしていきたいと考えている。色々なネットワークを辿っていくと、男子学生も同時に４人来ており、女性４人と合わせて８人が来ている。おそらくこの方たち、ジョンさんも、お父様が王室直属の陸軍の方ということで、このような王室の世界であり、安定している社会なので、おそらくこの方たちの子孫が今いらっしゃる。それを掘り起こしていきたいというきっかけが、今回一つできた。

それから、本学の卒業生が活躍しているということで、その日のレセプションで、本学の卒業生何人かと連絡をつけ、翌日の昼食会で、本学の卒業生だけで情報交換会をやったのだが、私よりずっと年上の方で、タイから留学された女高師の卒業生が、今でもご活躍していた。日本文化の紹介や障害児教育、黒柳徹子さんの、トットちゃんの本をタイ語に翻訳された方で、タイでは非常に有名になった方だった。

それから、若い方もおり、大学でポジションについており、日本語教育、日本文化を広めていらっしゃる。タイの他に、ラオス、ベトナムにもいる。その方たちが、国境を

越えて来た。皆さん若いので、バスを乗り継いできたとか。このようことが分かったので、このバンコクの事務所を拠点に、本学の卒業生のネットワークができる。彼女達は、日本語の教員や、企業にも就職しているが、日本文化の紹介や、教育などを頑張っており、教員の場合は任期付であったりそうでなかったりと様々だが、それぞれが情報交換をし、「次はうちが日本語教師を募集しているから、ぜひ来て下さい」という話も、すぐそこで広がった。年代を超えたつながりが、卒業生、そしてそれを通じて色々な大学とのネットワークも広がっていく。

これからは、本学から、私や担当の者が行って、あちらは少しまだ費用が安いので、レセプションをやっても、日本でやるのに比べたら安くできる。また今回、研修も兼ねて、２人の若い職員にも一緒に行ってもらい、事務所開きの様々な手配をした。色々なことをずいぶんと学ぶことができた。

☆お話を伺って、大変良い方向付けをされていると思うが、今、バンコクからは、留学生としてこちらに入っている方は何人位いるのか。

★９名来ている。バンコクだけではなく、タイ全体から。

☆こちらから出しているのは、何人位か。

★研究生が２名である。研究をしながらという形であるが。

☆タイとお茶大との間における、明治時代の交流というか、歴史的な裏付けというのを伺って、大変重要なお話であると思うのだが、そのように関係が密なのであれば、学長がタイを訪問する度に、できたら、タイの財閥あたりにコネクションを作れるようになれればと思う。

それから、大学に対する、あるいはタイの活動に対するサポートをしてもらうというパイプを繋げられるような道が開ければ、大変よろしいのではないか。日本からもかなりの人間が行っているので、お茶大の活躍というものを認識して、協力しようという財閥が全く無いとは考えにくいので、日本の大学に、タイの財閥が協力し、あるいは、資金付けをし、そして留学生関係の交換を促進する。そのような方向付けをすることが望ましいと思う。

★大変ありがたいご提案をいただいた。今後色々な形で、経営協議会の先生方にご相談させていただくことが出てくると思うが、どうぞよろしくお願いしたい。

（２）平成２０年度　学内予算（案）について

○平成２０年度 学内予算（案）について、学長より、【資料４】に基づき、特に留意して取り組む事項について説明があり、続いて、総務機構長より、編成案の詳細についての説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。

■　主な議論は以下のとおり。≪☆学外委員からの意見、★大学側からの発言≫

☆人件費の中で、残業手当というのはどういう具合で表現しているのか。平常どの位の残業手当が付加されているのか。

★もちろん人件費の中に残業手当が入っているのだが、残業手当は、月 45 時間がひとつの目安となっており、マキシマムが 80 時間と厳密に抑えられている。この 80 時間を超える残業をしてはならない。80 時間の月が、年４回を超えてはならないという規定があり、その範囲内で残業手当を支給している。

ただ、この残業というのは、本人がやると言っても認められるものではなく、上司にあたるチームリーダーが、「この仕事に対してはこれだけの残業が必要だ」と、前もって許可を得るというシステムになっている。また、例えば入試チームは、ある時期に非常に大きな残業が発生する。80 時間ぎりぎりということが、４カ月近く続くこともある。またある時期には、経理チームにそれが集中するということもある。全体としては、オーバーしないようにということと同時に、異常に少ないことにも注意を払っている。これは、実はサービス残業が発生しているという可能性もあるので、今、今年度中にその洗い直しを早急に行う作業を進めている最中である。

☆金額的にはどのくらい予算に組まれているのか。

★３，０００万円である。

☆洋書の購入というのは図書代であるが、大学の図書代の総額の中で、洋書の部分はどのぐらいの金額になるのか。海外から購入する本は、トータルでどの位あるのか。また、為替レートはいくらで設定しているのか。このところ、おそらく 100 円を割ってくるような状態になってきているが、どのような購入方法にスイッチしているのか。

★今、図書の購入方法は、図書館で購入するものと、教員が独自に、研究費の中から購入するという２つの方法を取っている。後者の方が多い。というのは、図書館の共通経費で図書を購入するというスタイルをこれまでは取っていなかったので、先生達が研究費の中で図書を購入するということが非常に多かった。図書館経費での購入費用がだい

たい４，０００万円位で、洋書の割合が何割かということだが、およそ６～７割位が洋書ではないかと思う。為替レートについては、やはり先生方が個々に購入するということもあるので、厳密には一律ではないと理解している。

☆例えば、今の段階で契約を結ぶとしたら、130 円、あるいは 125 円ということになると思うので、臨機応変に、半年に一度位ずつレートの約束事を変えた方が良いのではないか。

　また、教授が単独でネットを通じて購入するということについては、全レートでそのままやるので、一律のレートで本屋さんから買うよりも、かなり安いレートがあるということがあるので、そのような現実のレートに則した方法で購入される方が望ましいのではないかと思う。これもばかにならない。全体が４，０００万円なのであれば、かなりの数字になると思う。

★図書、雑誌、辞書を含めると、およそ７割から７割ちょっとくらいが外国物であり、主に雑誌が多い。レートについては、各四半期ごとに、各書店から見積りを出してもらい、そのうちの最も安いレートで設定している。

☆今、どの位のレートで支払っているのか。

★ドルで言うと、ほぼ 130 円台前半から 140 円台である。

☆おそらく 130 円位だと思うが、その辺りの調整がつけば、かなり変わってくると思う。
３点目として、業務委託費は、どのような形でこの中に組み込まれているのか。

★業務委託費は色々とあるが、例えば、守衛を警備会社にやってもらっているのだが、毎年この時期に入札をかけ、その結果という形でやっている。

☆コンピューター関係はどうか。学校全体の、いわゆる業務システムを展開していく中で、どこの企業を入れているかは分からないが、必ずそこから人が派遣されているのではないかと思うのだが。

★本学は、大きな大学と違い、全部本学の中でやっている。

☆奨学費というのが１億円ほど載っているが、これはお茶大の奨学制度なのか。その場合、お茶大の奨学金を受給している学生というのは、どの位の割合なのか教えていただきたい。

★奨学金を受給するというよりは、授業料免除である。それが大部分を占めている。

☆学費のディスカウントという形でやっているのか。

★免除である。半額免除や全学免除ということである。

★制度的に、授業料収入の５．８％を上限として免除するというルールがあり、その中で、全学免除、半額免除を行っている。

４．報告事項

（１）教育振興基本計画の在り方について〈中央教育審議会教育振興基本計画特別部会への提言〉

○教育振興基本計画の在り方について、学長より、【資料５】に基づき報告があった。

（２）平成２０年度入試における志願状況について

○平成２０年度入試における志願状況について、教育機構長より、【資料６】に基づき報告があった。

（３）お茶の水女子大学バンコク・オフィスの開設について

○お茶の水女子大学バンコク・オフィスの開設について、学長より、【資料７】に基づき報告があった。

（４）国立大学の学部における定員超過の抑制について

○国立大学の学部における定員超過の抑制について、教育機構長より、【資料８】に基づき報告があった。

（５）平成２０年度における運営費交付金予算額について（法人別）

○平成２０年度における運営費交付金予算額について、学長より、【資料９】に基づ報告があった。

（６）大学院・学部横断的教育の連携について

○大学院・学部横断的教育の連携について、学長より、【資料 10】に基づき報告があった。

（７）「女性研究者支援モデル育成」事業等合同シンポジウムについて（実施報告）

○「女性研究者支援モデル育成」事業等合同シンポジウムについて、学長より、【資料 11】に基づき報告があった。

（８）「歴史資料館施設整備募金」の使途について

○「歴史資料館施設整備募金」の使途について、学長より、【資料 12】に基づき報告があった。

（９）旅費支給の見直しについて

○旅費支給の見直しについて、総務機構長より、【資料 13】に基づき報告があった。

(10) 平成１９年度における本学の主な活動について

○平成１９年度における本学の主な活動について、学長より、【資料 14】に基づき報告があった。

５．自由討議

■　主な議論は以下のとおり。≪☆学外委員からの意見、★大学側からの発言≫

★週刊誌において、本学の附属小学校の給食の問題が掲載された。今の施設が大変問題だということが分かったのだが、これが 10 年間も指摘されていたにもかかわらず、全く大学に知らされていなかった。校長も知らなかったという、中身は非常にびっくりする話であった。改修しなければならないということになるが、そのお金は、今すぐにはない。このようなことで、週刊誌に掲載された。

★保健所からの指摘が 10 年間あり、衛生状態が悪いということは、附属学校部の運営委員会において、昨年 11 月に報告を受けていた。その 10 年間改修がなされなかったということについては、弁解のしようがない。

ただ、この週刊誌の記事で少し困ったのは、保護者に対しては、もちろん理由も全部説明しているのだが、いつ再開されるのかという問合わせが保護者から入ってきて、それに対する記事という格好になっており、大学のほうが、お金が掛かるから何も決めていないとなっている。「要は、金欠というあきれた言い訳だ」という台詞があり、この点に関しては、私が取材を受け、全面的に改修するとなると１億円掛かるが、衛生規準を満たすだけであれば、３，０００万円、４，０００万円でできないことはないと回答している。

ただ、全体として厨房設備が手狭であり、それだけ掛けてやっても、あまりはかばかしい、質的な向上は計れない。かと言って、全面的な改修をする場合には、拡げなければならないので、構造に関係する工事をしなければならない。そうすると、半年から、場合によっては９カ月とか１年掛かることになる。となると、その間給食が全面的にストップしてしまう。

そこで、自校方式というか、給食を支給することにはこだわらず、デリバリーも考えられるだろうし、あるいは「食育」というプログラムもやっているが、それはお弁当でもできることであり、柔軟に考えていくということを１月に確認しており、その方針でやっているということは重々説明して、施設を改修することがまずありきじゃないということを、むしろ、全面的に給食がストップすることも含めて考えているということをご説明してあったのだが、記者の段階では分かっていたようだが、おそらく、アンカーというのか、その段階では、一番突っつき易い部分になってしまったようだ。

このような書き方をされると、経営協議会委員の皆様に大変申し訳ない、お金が無いといった理由などと書かれると、これに携わっていらっしゃる委員の方々に申し訳ないと思い、その点重ねておわび申し上げたい。

☆おそらく、週刊誌がお茶大を取り上げたのも、有名税の一つ、名門税の一つだとは思うが、メディアで、本当に根も葉もないこととか、こんなこと言ったわけがないということあった場合は、一応、抗議書という形でお出しになったら良いと思う。そのことについて返事をくれと言って、向こうから「ごめんなさいね」のようなものが一つあれば、けりがつくと言うか、保護者の方へのご説明にもなると思うので。その手続きは一応なさったほうが良いのではないかと思う。弁護士を立てるとか、そういう大げさなことではなく。

☆今は附属学校の話だが、先ほど学長がおっしゃった件で、次の中期計画の問題だというお話だったが、学長がおっしゃるように、教員養成という主眼が無くなったということで、お茶大に限らず他の大学についても、附属学校をどうするかということが非常に大きな問題になってくると思う。

私は、やはり、幼稚園から小学校、大学までという一貫教育というのは、それなりの意味があると思うし、上級の学生が下の学生達を指導する、世話をするというような、非常に恵まれた一貫校の仕組みというものを維持していくことは、良いのではないかと思う。教育という面でも、子どもの成育に沿った、長期的なプランを立てるということが可能になるということだろうと思うが、問題は、附属高校から大学への進学者が非常に少ないという話を前に伺ったことがある。やはりこれを少し増やさないと、一貫教育という名前が泣くのではないかという気がしてならない。そうなると、高校生が行きたがる、附属高校の生徒が行きたがるようなお茶大にしなければならない。今、学部が３

つあるわけだが、それが必ずしも今の女性のニーズに即しているかというと、そこはちょっとどうかなという気もするわけである。例えば、今の女性にしてみれば、弁護士や金融関係のアナリスト、あるいはお医者さんとか、女性でなければできないような形で、社会で活躍をしている方がたくさんいるわけである。そのような人たちのニーズにどう答えるかということを、やはりお茶大として考えなければならないのではないか。医学部を作るというのはそう簡単にできないと思うが、法学部や経済学部というのは、先生を集めてくればできないこともない。そういう形で、附属高校からの進学をもうちょっと増やすような仕組みを考えられないだろうか。女性のリーダーシップ育成というのが貴学の目的で、それは大変結構なことだと思うのだが、そのリーダーシップというのが、これまでのような形での女性の社会進出だけではなく、もう少し現代的なニーズに即したものに見直しをしていく必要があるのではないかということを感じたので、中期的な問題かとは思うが、ご参考までに。

★大変貴重なご意見を頂いた。本学の文教育学部にはないが、受験生が、本学から早稲田、慶応に流れていく、これはおそらく学部の問題であり、本学に無い学部、法学部や経済学部を本来は希望しており、本学は滑り止めという方はたくさんいる。

それから、女性で文系の優秀な方は法学部や経済学部、理系であれば医学部というのは、ここの附属でもそうだと思うので、おっしゃる通りである。このことは、いろいろなところから、いろいろな方にご指摘を頂いている。ただ、卒業生の多くは、やはりどうしてもご自身の昔のことがあるので、例えば児童学科が無くなったのは残念、戻して欲しいとか、それぞれ皆さん昔のことをおっしゃる。

それから、教員養成大学では、優秀な教員が生まれにくい。特に理系の教員はなかなか養成できないということもあるので、優れた理系の教員を、研究者になりたい人であっても、教員になってもいいと考える人もいるので、色々な可能性を、今これから、次の中期目標期間に向けて、早急に練っていかなければならないと考えている。

☆追加で少し申し上げれば、例の５女子大学コンソーシアムとか、バンコクの事務所開設とか、これらはお茶大の国際化という意味で素晴らしいことだと思う。これらが、お茶大の存在意義を、日本の女性教育において非常に成功したケースということで、それを途上国にも伝えていくという国際貢献的な意味もあり、素晴らしいことだと思うが、今の日本の女性のニーズにも、やはり応えていく必要があるのではないかという感想を持った。

６．閉会

○次回開催は、平成２０年６月２３日(月)１５時からであることを確認した。

以　　上